

国立国語研究所学術情報リポジトリ

談話資料における間投助詞の地域差について

著者	井上 文子
雑誌名	大規模方言データの多角的分析 成果報告書：言語 地図と方言談話資料
ページ	1-12
発行年	2013-03-31
シリーズ	国立国語研究所共同研究報告；12-05
URL	http://doi.org/10.15084/00002687

談話資料における間投助詞の地域差について

井上 文子
(国立国語研究所)

1. 相手への働きかけを示す助詞

話しことばに特徴的に現れるもののひとつとして、「あのネ、あしたネ」、「あのサ、あしたサ」、「あのナ、あしたナ」と言う場合のような、文中の切れ目に入る「ネ」「サ」「ヨ」「ナ」「ノ」などがある。いわゆる間投助詞と呼ばれるものである。多くは、プライベートなうちとけた会話に用いられるが、場合によっては、「です」などを伴って、「あのですね」、「ということはですね」のように、多少あらたまった場面でも使われることがある。また、書きことばでも、手紙のように相手に伝えるような文章には表れることがある。

間投助詞は、他の助詞と違って文中で使われる位置の制限が少なく、文節の終わりにならどこにでも比較的自由につく。これを取り去っても文の成立や意味内容そのものには影響がない。けれども、文全体の調子に抑揚をつけて、自分の話しぶりを強調したり、相手の関心を引きつけたりなど、相手への働きかけの気持ちを添えている。

ここでは、地域方言における間投助詞について、全国分布、場面による切り換え、談話の中での使われ方の概観と、間投助詞をめぐる印象と評価の一端を見ていくことにしたい。

2. 間投助詞の全国分布

国立国語研究所編『方言文法全国地図』第6集の「間投表現」では、いわゆる間投助詞について、どのような形式が各地で用いられているか、全国的な分布を明らかにすることを目的としている。具体的な質問文は次のとおりである。

O 場面「親しい友達にむかって、「今日、役場に①なあ、行ったら②なあ」のよう言うとき、「役場になあ、行ったらなあ」のところをどのように言いますか。」
《245-O》

A 場面「近所の知り合いにむかって、ややていねいに言うときはどうですか。」《245-A》

B 場面「この土地の目上の人にむかって、ひじょうにていねいに言うときはどうですか。」《245-B》

「(役場に) ①なあ」は、名詞を含む文末以外の文節に後続する場合、「(行ったら) ②なあ」は動詞を含む文末以外の文節に後続する場合をたずねるものである。文法的な位置の違いがある2か所を設定し、各地におけるそれぞれの形式を求めている。

また、「O 場面」は、「親しい友達」に対する「くだけた形式」を、「A 場面」は、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」を、「B 場面」は、「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」をたずねるものである。話し相手への待遇度の違いがある3場面を設定し、各地におけるそれぞれの形式を求めている。

O 場面「親しい友達」に対する「くだけた形式」

A 場面「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」

B 場面「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」

間投助詞の全国的な出現状況は、文中の位置2か所と話し相手の異なる3場面とを組み合わせ、下記の6枚の地図により示されている。

第6集 第343図 役場になあ、行ったらなあ (B 場面)

第6集 第344図 役場になあ、行ったらなあ (A 場面)

第6集 第345図 役場になあ、行ったらなあ (O 場面)

第6集 第346図 役場になあ、行ったらなあ (B 場面)

第6集 第347図 役場になあ、行ったらなあ (A 場面)

第6集 第348図 役場になあ、行ったらなあ (O 場面)

出現する間投助詞は、広い地域に見られる「ナ」「ノ」「ネ」「ヨ」や、特定の地域に現れる「ヤ」「クサ」「ニヤ」「ネヤ」「ナシ」「ネシ」「ノシ」「ナモ」「ナンシ」「ナンタ」「ノンタ」など、項目によって異なり、また、分布領域が違うが、共通する形式も多い。

図1に、間投助詞の分布状況の一例として、「345図 役場になあ、行ったらなあ (O 場面)」の簡略図を示す。「ナ」「ナー」を「ナ系」、「ノ」「ノー」を「ノ系」、「ネ」「ネー」を「ネ系」、「ニヤ」「ニャ」「ニヤー」を「ニヤ系」、「ネヤ」「ネア」を「ネヤ系」などのように、ある程度形式をまとめて表示している。

「親しい友達」に対する「くだけた形式」の間投助詞としては、「ナ系」が北海道から岡山県あたりまでの広い範囲で、「ノ系」が中国や、四国・九州・近畿の一部、東北・北陸の日本海側の各地で、「ネ系」が九州でまとまって使われている。また、意外にも、「サ系」はほとんど現れない。「ヨ系」は東北・関東・沖縄などに、「ヤ系」は東北・沖縄に分布している。そのほか、特徴的な形式として、「クサ系」は福岡・佐賀に、「ニヤ系」は長崎などに、「ネヤ系」は高知・愛媛などに見られる。

3. 間投助詞の場面差

話し相手への待遇度の違いがある3場面の、「親しい友達」に対する「くだけた形式」、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」、「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」を比較すると、出現語形や分布領域に異なりが見られる。

全体的な傾向として、場面が高くなるほど「ナ」「ノ」が減少し、「ネ」が増加するようである。しかし、鹿児島など、「ナ」と「ネ」について逆の使い分けの見られる地域もある。上位場面で分布が広がる「ノシ」「ナモ」、下位場面に多く現れる「クサ」「ネヤ」「ニヤ」「ヨ」(関東・東北)など、地域による特徴が観察される。一方で、場面にかかわらず同じ語形が用いられる地域もある。

間投助詞の場面による違いの一例として、「役場になあ、行ったらなあ」をとりあげ、「345図 役場になあ、行ったらなあ (O 場面)」「344図 役場になあ、行ったらなあ (A 場面)」「343図 役場になあ、行ったらなあ (B 場面)」を比較しながら、おもな語形について、その出現状況を概観する。

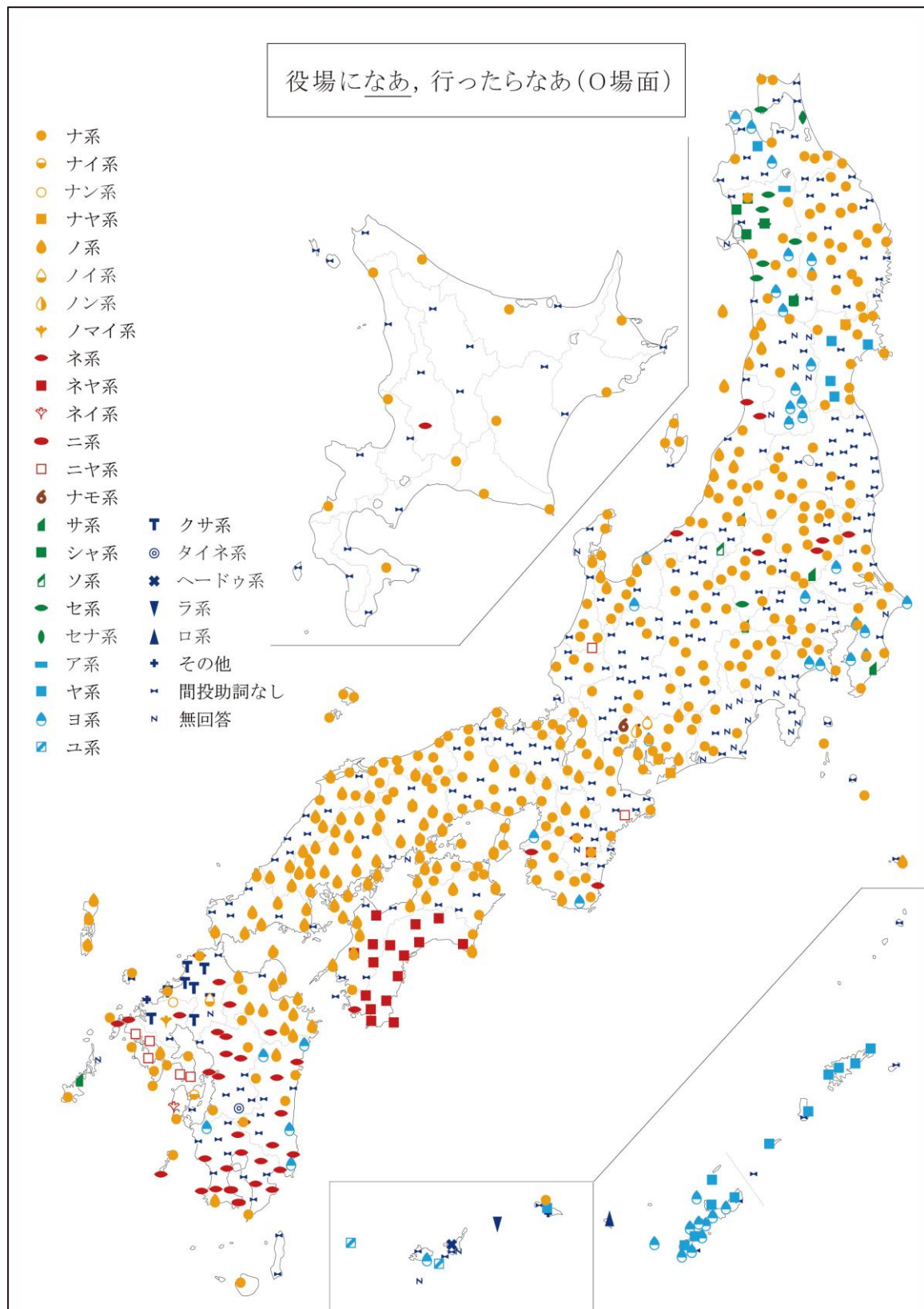


図1 「345 図 役場になあ, 行ったらなあ (O場面)」簡略図

図2・図3・図4は「ナ系」の出現地点のみを記した地図である。東日本などでは、「親しい友達」に対する「くだけた形式」(図2)には広く分布するが、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」(図3)や「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」(図4)のように高い場面になると、あまり現れなくなる。

一方、鹿児島など九州南部では、「ナ系」は「親しい友達」に対する「くだけた形式」(図2)では使われないが、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」(図3)や「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」(図4)では多用され、東日本などとは逆の使い分けが見られる。

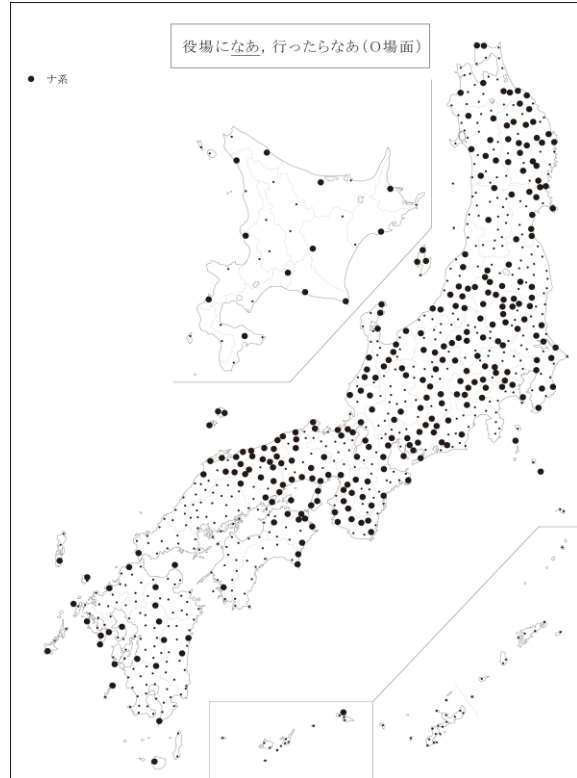


図 2

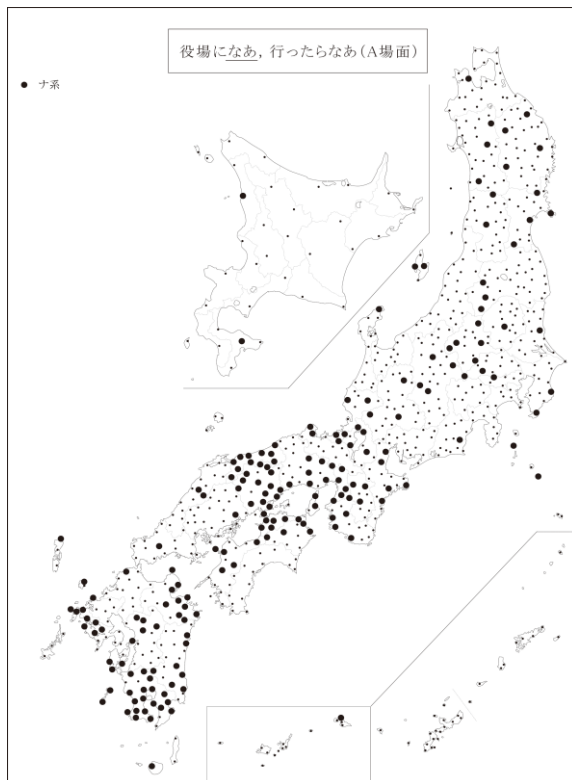


図 3

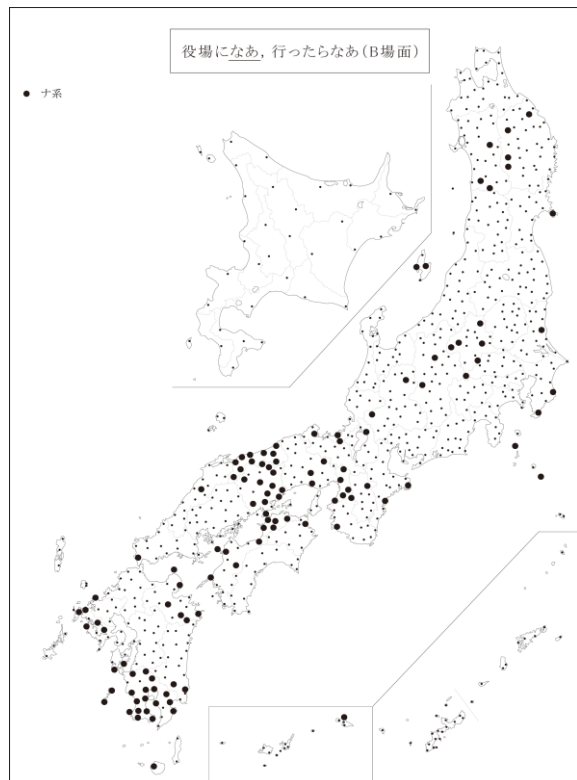


図 4

また、鳥取・大阪南部などのように、場面にかかわらず「ナ」が用いられる地域もある。いずれの場面においても「ナ」が現れない地域には、中国西部・四国南部などのように別の形式を用いる場合と、「間投助詞なし」と回答された場合とがある。

図5・図6・図7は「ノ系」の出現地点のみを記した地図である。岡山・香川や大分では、「親しい友達」に対する「くだけた形式」(図5)にまとまった分布が見られるが、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」(図6)や「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」(図7)になると、分布が消えてしまう。岡山・香川では“下位場面「ノ」「ナ」の併用”から“上位場面「ナ」”へ、大分では“下位場面「ノ」”から“上位場面「ナ」”へ切り換えている。これらの地域では「ノ」よりも「ナ」のほうの待遇価が高いと解釈できる。

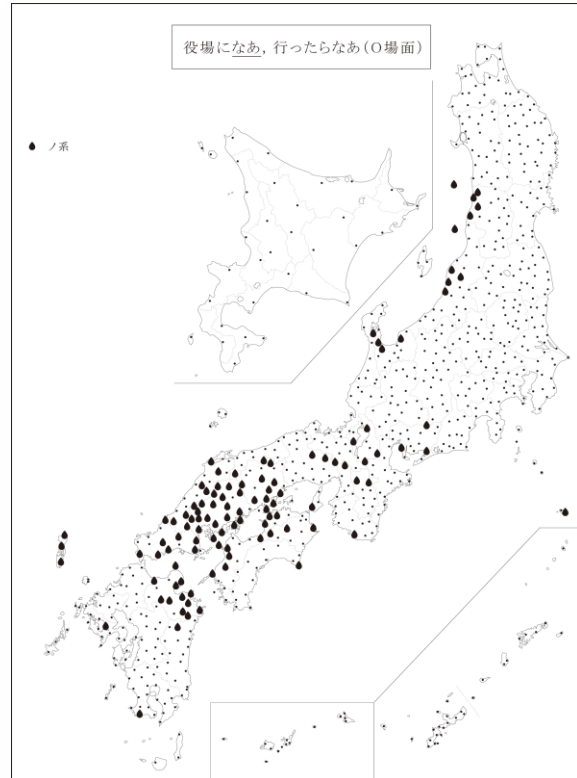


図5

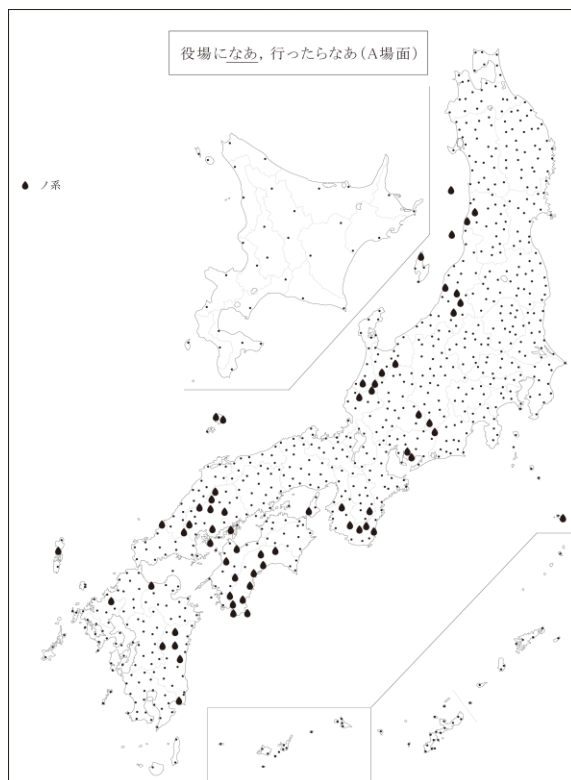


図6

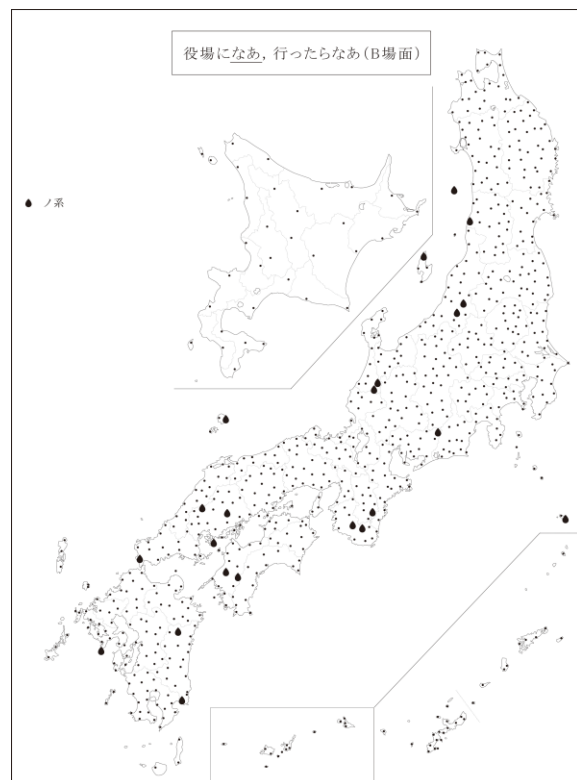


図7

一方、和歌山南部などでは、「ノ系」は「親しい友達」に対する「くだけた形式」(図5)には現れないが、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」(図6)や「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」(図7)になると出現し、岡山などとは逆の使い分けが見られる。和歌山南部では“下位場面「ナ」”から“上位場面「ノ」”へ切り換えている。この地域では「ナ」よりも「ノ」のほうの待遇価が高いと解釈できる。

また、山形庄内地方のように、場面にかかわらず「ノ」が用いられる地域もある。いずれの場面においても「ノ」が現れない地域には、東日本などのように別の形式を用いる場合と、「間投助詞なし」と回答された場合とがある。

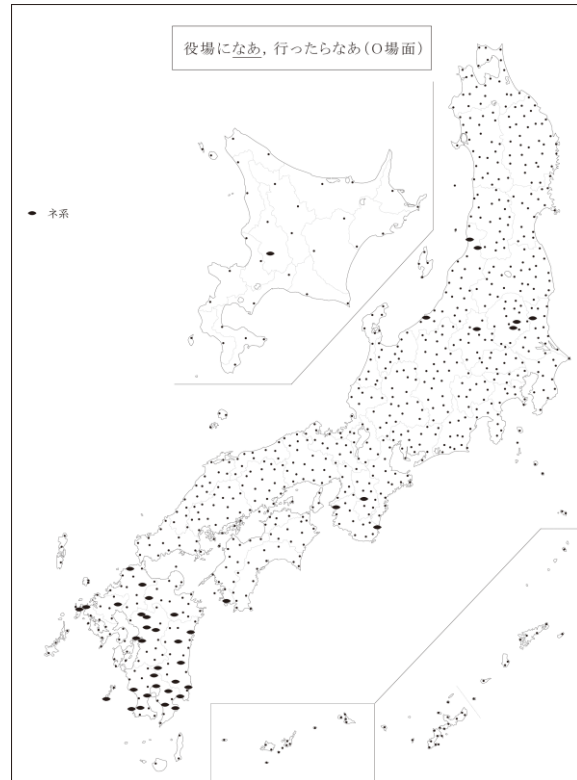


図8

図8・図9・図10は「ネ系」の出現地点のみを記した地図である。本州では「親しい友達」に対する「くだけた形式」(図8)にはほとんど現れないが、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」(図9)や「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」(図10)になると、関東・北陸など各地に分布が広がる。たとえば、富山県富山市新庄町などの地点で、“親しい友達「ナ」—近所の知り合い「ネ」—この土地の目上の人「ネ」”という切り換えが行われている。

一方、鹿児島など、九州南部では、「ネ系」は「親しい友達」に対する「くだけた形式」(図8)にはまともに現れるが、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」(図9)や「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」(図10)になるとほとんど使われなくなり、本州とは逆の使い分けが見られ

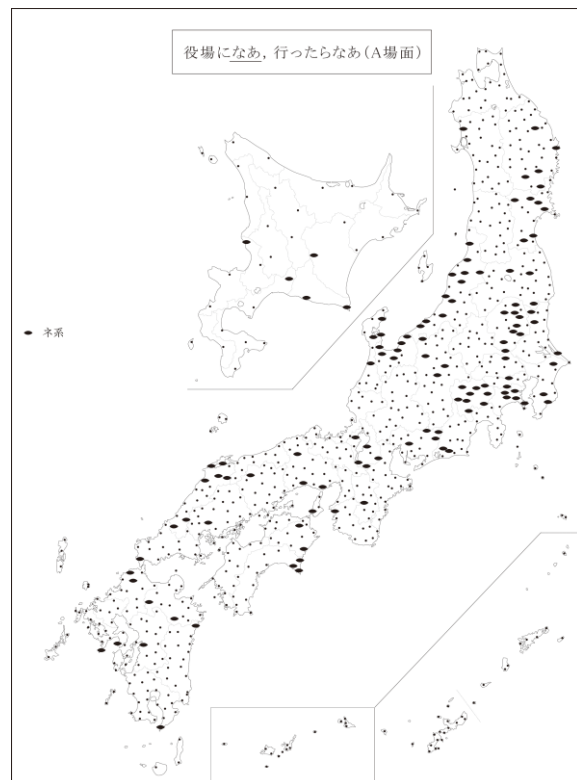


図9

る。たとえば、鹿児島県姶良郡横川町中ノ・鹿児島県串木野市本浜町・鹿児島県国分市中央4丁目・鹿児島県鹿児島市冷水町・鹿児島県曽於郡大隅町中之内など多くの地点で、“親しい友達「ネ」－近所の知り合い「ナ」－この土地の目上の人「ナ」”という切り換えが行われている。

また、地域的にまとまりのある分布として、上位場面で現れる「ノシ」「ナモ」、下位場面に現れる「クサ」「ネヤ」「ヨ」（関東・東北）などが観察される。

なお、「敬語（デス・ゴアスなど）＋間投助詞」の形である「デスナ」「デスノ」「デスネ」なども、おもに広島・九州では、「近所の知り合い」に対する「やや敬意のある形式」や「この土地の目上の人」に対する「もっとも敬意のある形式」の場面に使われている。



図 10

このほか、場面による差が見られるものに、「間投助詞なし」がある。全体的な傾向として、「間投助詞なし」は上位場面で増加する。上位場面には間投助詞は使わないとする話者の内省も多い。ただし、京都・福島東部・岐阜など（「無回答」を「間投助詞なし」と解釈すれば、静岡なども）、「親しい友達」に対する「くだけた形式」としても「間投助詞なし」と回答された地域もある。

話し相手が異なる3場面についての間投助詞の出現状況により、話し相手への待遇度による間投助詞の使い分けを読み取ることができる。また、「ナ」や「ノ」や「ネ」など、同じ形式の間投助詞でも地域により場面の現れ方の違い、待遇度の違いが認められる。このことは、各地の間投助詞の待遇価の違いを表している結果であるとも言える。ただし、「近所の知り合い」や「この土地の目上の人」に対することばの切り替えの認識が各地で異なっている可能性も考えられる。

4. 関連項目 終助詞

間投助詞と終助詞とは、使われる位置の制限や、文に与える意味の重要性などについて相違点があるが、意味や形式の面で関連も深い。『方言文法全国地図』には、終助詞（「疑問」を除く）が接続する項目に、下記のものがある。第6集の「第322図 寒いですね（B場面）」「第6集 第324図 寒いですね（A場面）」「第6集 第326図 寒いですね（O場面）」（調査時の質問文は「今日は寒いな」）でも、今回取り上げた「役場になあ」に出現した間投助詞と同じ形式の終助詞が出現しており、あわせて確認する必要がある。

第4集 第164図 うん、無いよ

第4集 第166図 いや、有るよ
 第5集 第187図 おもしろかったなあ
 第5集 第189図 行ったなあ
 第5集 第191図 いたよ
 第5集 第193図 書いたよ
 第5集 第195図 強かったよ
 第5集 第222図 行くなよ（やさしく）
 第5集 第224図 行くなよ（きびしく）
 第5集 第228図 行きたいなあ
 第5集 第236図 行こうよ
 第6集 第322図 寒いですね（B場面）
 第6集 第324図 寒いですね（A場面）
 第6集 第326図 寒いですね（O場面）
 第6集 第328図 本ですね（B場面）
 第6集 第330図 本ですね（A場面）

5. 方言談話に現れる間投助詞

『方言文法全国地図』における間投助詞の分布状況と比較して、各地域の方言の会話ではどのような使われ方の特徴が見られるだろうか。各地の会話の記録である方言談話資料のひとつ、『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』から間投助詞が用いられている具体的な使用例をいくつか抜き出してみる。（引用部分については、書式と共通語訳を原本から一部変更した。共通語訳では間投助詞を便宜上「ね」と訳している場合がある。発話に挟まれたあいづちは省略した。）

■奈良県五條市五條・1923（大正12）年生まれ（収録時58歳）・女性

〔1981（昭和56）年収録〕

イヤ ワタシカッテナ アノ リョコーノトキノナ キロクナ、 アルバムイハッテナ シャシン。 ホテー アノー ナニ ショー ト オモテ、 イヤー センキョサンノ ミセテモータラナ イヤ コナイ シトイタ オモイデン ナルナー ト オモテ オモイモッテ コノ、 ア、 アノ シャシン タマッテシモテ。

（いや、私だってね、あの、旅行の時のねえ、記録ね、アルバムに貼ってね、写真を。そして、あの、あれをしようと思って、いやあ、仙居さんを見せてもらったらね、いやあ、こうしておいたら、思い出になるなあと思って、思いながら、この、あ、あの、写真がたまってしまうて。）

■愛媛県松山市久谷町奥久谷・1914（大正3）年生まれ（収録時67歳）・女性

〔1981（昭和56）年収録〕

ダイデノ コーヤッテ ナワオノ アノ チャント タグッテノ ホイテ ソレオ イチワニシテノ ホイテ イチワ ナンボ ユーテ トベ

モッテイキヨッタン。

(台でねえ、こうやって縄をねえ、あの、ちゃんと手繰ってねえ、そして、それを1把にしてねえ、そして、1把がいくらと言って、砥部へ持っていったの。)

■秋田県湯沢市角間・1904（明治37）年生まれ（収録時73歳）・女性

[1977（昭和52）年収録]

オレアエノ バッパヨ一 シュードバッパ ユーオンダケタ ナンデオ
オナコ° ダジダンバ コーエ アノ ヤッコエ ドゴサナ ササルフンデヨ ソエデ
ン一 チョエト ナンデルドヨ ビリーッテ ユーオンダド

(私の家のおばあさんねえ、姑が言うものであった。なんでも、女たちならば、こういう、あの柔らかいところへね、刺さるようでね、それで、うん、ちょいとなでるとね、びりっというものだって。)

以上の例では、『方言文法全国地図』の当該地点およびその周辺地点に分布する形式が談話の中にも登場している。用例としては女性の発話を取り上げたが、「ナ」「ノー」「ヨ」についても、男女の差なく用いられている。

一方、『方言文法全国地図』には明確な分布としては現れないが、ひとりの人の話の中に、さまざまな形のものが見られることがある。言語地図では、東京には「サ系」はほとんど分布していないが、談話には多用されている。

■東京都台東区・1911（明治44）年生まれ（収録時69歳）・男性

[1980（昭和55）年収録]

トコロカ° ネ一 キョ オトトシカナー オテーチャンノ テレビ ヤッテサ ソレデ
フーズクコーショー コッチカ° ウケモッテサ一。 ソーシタラ アレ ハイユーサン
カ° シキー フンジメヤーカ° ッタンダヨ。 コマッチャッテサ。 ソイデ シンブン
トーヒョー サレテサ一 アンナーナー ナイ ト。

(ところがねえ、去、一昨年かなあ、「おていちゃん」のテレビをやってさ、それで、風俗考証をこっちが受け持ってさあ。そうしたら、あれ、俳優さんが敷居を踏んでしまいやがったんだよ。困ってしまっさ。それで、新聞投書をされてさあ、あんなのはないと。)

逆に、『方言文法全国地図』では、「ネ系」「ニ系」などの間投助詞が見られる場合でも、談話にはあまり間投助詞が用いられない地域もある。

■鹿児島県揖宿郡頰娃町牧之内飯山・1902（明治35）年生まれ（収録時75歳）・男性

[1977（昭和52）年収録]

X10 ワ モー ムガシ タイショー タイショーナンネンヂャッタガ タイショー
チョード タイショー、ヒチハチネンヂャラセンヂャッタログ アタイカ°
カコ° イメ オッ トツヂャッタデ マダ ショセーノ ウヂ アダイカ°
ゲシュクヂュー カヂヤチョーニ アダシャ オッタカ° ゲシュクギー

X11 オヂヤ X10 オヂヂャッチュー アスッケ キオツタンヂャ ニチヨービン
ヒロ

(X10 は、もう、昔、大正、大正何年だったか、大正、ちょうど、大正 7、8 年ではなかっただろうか。私が鹿児島市にいる時だったから。まだ書生の頃、私が下宿中、加治屋町に私はいたが、下宿まで X11 おじさんや X10 おじさんたちは遊びに来ていたんだ。日曜日の日は。)

これらは、間投助詞の使用の多寡に特徴があり、用いられる間投助詞の形式がさまざまである、代表的な地域である。『国立国語研究所資料集 13 全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』に収録されている、それぞれの地域の談話全体を対象として、主要な間投助詞の出現状況をまとめてみた。

収録地点	収録時間	ナ系	ノ系	ネ系	サ系	ヨ系	ヤ系
秋田県湯沢市	28 分 49 秒	37	0	0	0	22	0
東京都台東区	34 分 51 秒	6	0	220	34	0	0
奈良県五條市	33 分 39 秒	157	0	1	0	0	0
愛媛県松山市	31 分 48 秒	38	100	2	1	0	0
鹿児島県揖宿郡	34 分 29 秒	12	0	2	0	0	0

語や語の運用のしかたの地域差を明らかにするためには、実際の談話を切り取って観察することが必要である。何気なくしゃべっていて話し手本人も無意識のうちに用いていることばや、内省の中では合理化されていることばが、実際にはどのように用いられているかを、談話資料の中に見つけることができる。また、談話から文脈や使用状況が読み取れることによって、話者自身には意味の説明の難しい語や文法形式についても、観察者にとっては分析が可能となるという利点もある。

6. 地域間コミュニケーション・ギャップ

地域によっては、「あのな」「あのよ」を女性が使うことに違和感を持ち、「乱暴」「ぞんざい」「男っぽい」と感じたり、「あのね」を男性が用いることを「女っぽい」という印象でとらえることがある。また、「あのさ」を「都会風」「東京っぽい」／「きざ」「気取っている」などのように、肯定的／否定的に評価することもある。さらに、地域によって、話し相手が目上か目下かで使える語が決まっていたり、くだけた場面でしか使えないなどの制限があったりすると、「なれなれしい」「失礼だ」という行き違いが生まれるおそれもあるだろう。

尾崎喜光 2003 では、東京圏と阪神圏の大学生・大学院生を対象に、間投助詞の使用と評価について調査している。

「なあ」については、関西では男女共通で多用されるが、関東では使用がほぼ男性に限定されているため、関東の人には男性的なニュアンスを伴って受け止められ、女性の「なあ」の使用は否定的な評価につながる可能性がある。実際には、女性の使う「なあ」につ

いて、関東の人は積極的な評価を伴わない「特に何も感じない」が最も多く、「良い感じがする」は3割、「あまり良い感じがしない」は2割前後で、関西の人が思っているほど、関東の人には否定的には受け止められていない。

また、「ねえ」については、関東の女性が多く使う表現であるため、男性による使用が少ない関西の人には、女性的なニュアンスを伴って受け止められ、男性の「ねえ」の使用は否定的な評価につながる可能性がある。実際には、男性の使う「ねえ」について、関西の人は「あまりよい感じがしない」が半数を超え、特に、関西の女性の数値が高く、関東の人が思っている以上に、関西の人には否定的には受け止められている。陣内正敬 1999 でも、関西では、「ネ」を使う男性には女っぽい印象があることが指摘されている。

7. 印象と評価の背景

昭和 30 年代に神奈川県鎌倉市の腰越小学校で起こり、全国に広まった「ネサヨ運動」は、語尾に「ネ」「サ」「ヨ」を使わないようにする活動として有名である。また、福岡県筑穂町の大分小学校で昭和 37 年から 3 年間続けられ、九州地域で展開した「ネハイ運動」は、地元で語尾につける「クサ」の代わりに「ネ」を使い、「ん」の代わりに「はい」と返事し、美しく丁寧なことばにしようという活動であった。いずれも、本来の動機・実態は、ことばの使い方を考えようとする創造学習や社会へ出た時の基礎教育としての教育活動であったようである（橋本典尚 2005 など）。

「ネ」「サ」「ヨ」を「悪いことば」と意識して、なくそうとする行動と、「ネ」を「いいことば」と意識して、「ネ」をつけようとする行動、このふたつの活動の「ネ」に対する評価と志向する方向は逆である。「ネ」「サ」「ヨ」と「間投助詞なし」、「クサ」と「ネ」の認識の違いは、それぞれ、下位場面と上位場面での使用形式の差にも関連しているようである。

このような、言語使用や言語意識の違いから生じる評価や、誤解・違和感といったコミュニケーション・ギャップなど、各地で異なる印象と評価の背景にある言語形式と運用の実態、その地域差について、使用者の属性・使用場面・語の丁寧度などを、分布データ・談話データなどを利用して総合的にとらえたいと考えている。

参考文献

- 尾崎喜光 (2003) 「用法に地域差が伴う言語表現に対する相互評価—関東と関西の評価—」『社会言語科学』5 (2), 58-73.
- 国立国語研究所編 (2006) 『方言文法全国地図』第 6 集 国立印刷局.
- 国立国語研究所編 (2001~2008) 『国立国語研究所資料集 13 全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』全 20 巻 国書刊行会.
- 陣内正敬 (1999) 「東京のことばは女性っぽい?」『どうなる日本のことば 方言と共通語のゆくえ』大修館書店.
- 田中章夫 (1973) 「終助詞と間投助詞」『品詞別 日本文法講座 9 助詞』明治書院.
- 橋本典尚 (2005) 「「ことば」の教育活動と臨床視点—「ネサヨ運動」(腰越・永山東・大尼田) と「ネハイ」運動 (大分) ——1960 年代以降、全国展開した「ことば」からの教育的運動の実態と、現在の様子——鎌倉市腰越から全国展開した「ネサヨ運動」と、筑

穂町大分から地域展開した「ネハイ運動」―『東洋大学大学院紀要 文学研究科 国文学』41, 312 (1) -298 (15).